

第201回国会 資源エネルギーに関する調査会 第3号
令和二年二月二十六日（水曜日）
午後一時開会

本日の会議に付した案件
○原子力等エネルギー・資源に関する調査（「資源エネルギーの安定供給」のうち、エネルギーの安定供給（我が国のエネルギーの安定供給））

○会長（宮沢洋一君） ただいまから資源エネルギーに関する調査会を開会いたします。

（略）

○会長（宮沢洋一君） 原子力等エネルギー・資源に関する調査を議題といたします。

本日は、「資源エネルギーの安定供給」のうち、「エネルギーの安定供給」に關し、「我が国のエネルギーの安定供給」について三名の参考人から御意見を伺いした後、質疑を行います。

御出席いただいております参考人は、秋田大学大学院国際資源学研究所教授荒戸裕之君、関西大学社会安全学部教授小澤守君及び認定NPO法人環境エネルギー政策研究所所長飯田哲也君でございます。

（略）

この際、参考人の皆様に一言御挨拶を申し上げます。

本日は、御多忙のところ御出席いただき、誠にありがとうございます。

皆様から忌憚のない御意見を賜りまして、今後の調査の参考にいたしたいと存じておりますので、よろしく御願いいたします。

次に、議事の進め方について申し上げます。

まず、

荒戸参考人、小澤参考人、飯田参考人の順にお一人二十分程度で御意見を述べいただき、その後、午後四時頃までを目途に質疑を行いますので、御協力よろしくお願いいたします。

また、御発言の際は、挙手をしていただき、その都度会長の許可を得ることとなっておりますので、御承知おきください。

なお、御発言は着席のままでも結構でございます。

それでは、まず荒戸参考人から御意見をいたします。荒戸参考人。

○参考人（荒戸裕之君） 御紹介いただきまして、ありがとうございます。秋田大学の荒戸裕之と申します。本日は、このような機会を与えていただきまして、感謝申し上げます。

スライドを中心に説明をさせていただきます。（資料映写）

（略）

○会長（宮沢洋一君） ありがとうございます。次は、小澤参考人をお願いいたします。

小澤参考人。

○参考人（小澤守君） 関西大学の小澤でございます。

私は、元々が機械工学、学部の名前は社会安全学部という安全問題を扱うところにおりますが、出身は機械工学でありまして、ボイラーとか原子炉とか、そういうところの技術に関係するような仕事、研究をやっております。（資料映写）

（略）

○会長（宮沢洋一君） ありがとうございます。次に、飯田参考人をお願いいたします。

飯田参考人。

○参考人（飯田哲也君） 環境エネルギー政策研究所の所長の飯田哲也と申します。本日は、お招きいただきまして、ありがとうございます。（資料映写）

（略）

○会長（宮沢洋一君） ありがとうございます。以上で参考人の御意見の陳述は終わりました。

これより参考人に対する質疑を行います。本日の質疑はあらかじめ質疑者を定めずに行います。

まず、各会派一名ずつ指名させていただきます。その後は、会派にかかわらず御発言いただけるよう整理してまいります。なお、質疑及び答弁は着席のままでも結構でございます。

また、質疑者にはその都度答弁者を明示していただくとともに、できるだけ多くの委員が発言の機会を得られますように、答弁を含めた時間がお一人十分以内となるように御協力をお願いいたします。それでは、質疑のある方は挙手をお願いします。

宮崎雅夫君。

○宮崎雅夫君 自民党の宮崎雅夫でございます。

今日、三人の先生方には、それぞれの視点から大変貴重な御意見をいただきまして、まず御礼を申し上げます。

私から

は、農村の再生可能エネルギーについてお話を伺いたいと思います。

荒戸先生は特段再生可能エネルギーというようなお話ではなかったわけござ

いますけれども、小澤先生も含めて、技術の大切さということを最後におっしゃったわけございまして、私も分野は違いますが、やはり技術というのは継続してしっかりとやっていかないといけないということを改めて認識をさせていただいたわけございまして、そういう観点も含めてお伺いできればと思います。

再生可能エネルギーについては、先生方からお話ございましたけれども、もちろん、化石燃料の重要性はもちろん高いということございまして、主力電源化に向けた取組が進められているわけでございまして、エネルギーの安定供給という観点から、その重要性は増しているんだろうというふうに思っております。

それから、小澤先生からお話ございました。一昨年の胆振東部の後のブラックアウトもございましたし、昨年の台風十五号では千葉県で相当長期にわたる停電もあったというのを踏まえていけば、そういうリスクをやはり下げていかないといけないということを考えれば、



地域分散型のエネルギーとしても大きな役割というのも果たせるんじゃないかなというふうに思います。

それから、ある意味、私の専門の部分になるわけですけれども、農村には、いろんな、まさしく多種多様、これは有形無形も含めて地域資源があるということでごさいますして、それをやはり適切に保全管理をしながら、持続的に最大限活用するということによって地域資源自身の循環を活性化させるというふうなことも期待できるんじゃないかなというふうに思っております。農村振興というように観点から、飯田先生は太陽光と風力というお話でございましたけれども、農業用水を活用しました小水力発電でございませうと、林地残材、それから家畜の排せつ物、こういったものを活用したバイオ発電なんかも含めて再生エネルギーを農村部で活用を進めるべきじゃないかなというふうに思っております。

まさしく、FITが始まって、太陽光を始めとして単価がもう全然違うわけですから、相当進んできたということでごさいますけれども、今やはりちよつとそのスピードは実際落ちてきているわけでごさいますし、FITの見直しということも行われてくるわけでごさいますけれども、今後、農村部で再生可能エネルギーを進めていくということとした場合に、やはりこういうことを是非やっていくべきじゃないかというふうなことにつきまして、三人の先生方から、それぞれ御意見があればお話を伺いたいと思っております。

○会長(宮沢洋一君) それでは、まず、荒戸参考人からお願ひいたします。

○参考人(荒戸裕之君) 再生可能エネルギーのお話になっていますので私の分野とかなり実は違いますが、農村とい

ますか、都市部と違うところのそのエネルギーに関する話ということで少し私なりに捉えますと、日本のその石油、天然ガス資源というのは、かなりやつぱり分布が偏っているんですね。

秋田県なんかで見えていますと、実際には今もうほとんど人が住んでいないような場所に実は昔何万人も住んでいた、そういうところに油田があったというような状況も実はあります。地下資源ですから、ほとんど場所が変わっていくというのは当然なんです。実際にそれは全くなかったからそこが終わったかという、実はそうでもなくて、まだ残しつつ終わっているんですね。その時点で採算ベースを切ってしまったので終わっている。

これは、今の例えば海洋の油ガス田でもそうで、埋蔵量を残しつつ、でもそれはビジネスですから、やめなきゃいけないときは経営者はそのように判断してやめてしまうわけですね。それを国として、その資源を一体どういうふうに見ていくのかというところはもう少し考える余地があるのかなというふうに思います。

○参考人(小澤守君) 農村と今おっしゃいましたけれども、いわゆる都市近郊の農村と、本当に日本で一番問題になっている、農業政策の問題になっている山の山の中の田舎、私が生まれましたのは兵庫県のご真ん中で、山の中で生まれましたので、ほとんどが言わば限界集落に近い状態になっていると、そういう場所でのエネルギーの問題、あるいは交通の問題を含めて、経済的な問題も含めて、それから都市近郊で比較的大規模農場ができるようなところは少し分けて考える必要があると思うんですね。

昔は、それぞれの家の屋根に太陽熱を集めて、それで農作業の後、風呂の湯に

使うとかいうようなことをやってきた。ある意味、自分たちでエネルギーを生み出すというわけではないですが、うまく活用することがあったわけでも、農業政策そのものが随分変わってしまつて、

そういうところでは結局、農村にありながら農業をやらないで、車に乗って近くの町へ仕事に行くという、そういう生活になつてしまつてい

それから、バイオなんかも、大規模に乳牛なんかを育てているようなところ、あるいは牛を育てているようなところは、そこからバイオガスを使つてメタンを発酵させてというふうなこともできますし、それから、比較的なだらかな山



林ですと木材のチップなんかを使って蒸気を発生させるというふうなこともできますが、急峻な山が非常に多い日本の中では、一概に全体としてというふうな形ではなかなかいかなないと。個別個別にそれぞれの対応を考える必要があるだろうと思ひますね。

再生可能エネルギーをうまく活用するというのは特に地方では非常に重要なことで、それがスマートグリッドなんかみたくない形になるかどうかはともかくとして、積極的に活用すべきだとは思ひつています。何でもかんでも石油、天然ガス、原子力でやれというふうには思ひつてい

○参考人(飯田哲也君) まず、私が申し上げたのは、風力と太陽光はまさに主力電源なんです。先ほどのちよつと絵でお見せしたように、バイオマスや地熱、温泉熱、小水力は地域の大切な資源として活用するというところで、私自身も全国のいろんな土地改良区さんとか地元の農協さんとか農家の方々と小水力や温泉熱発電とか一緒にいろいろやらせていただいているんですが、そのときにやつぱり非常に重要になるのは、基本的にはまず、地域のオーナシップというか参加が非常に重要だなど。

お手元の資料では三十三ページ目に、デンマークがいわゆる大規模集中型から地域分散型に変わつていっていると。見かけが分散に変わっただけではなくて、風力発電が六千五百基、コジェネが千基あるんですが、風力発電のこの八五%は、地域の人が、そういう農家の人が一人で持つていたり、あるいは風力協同組合という形で持つていっている。売電収益もそこに入つていくんですね。

ですから、そういう形を、しかもデン

マークは法律で一五%は地域の資本が入らないといけないことを義務付けていますので、そういう形で、地域の中にエネルギーだけではなくてお金も回る構図をやはりつくるといことが、その農村を改めて活用することが非常に重要で、それこそデンマークで農業大臣とかそれから専門家あるいは農家の方について、みんなが共通のコンセプトとして持っているのは、太陽エネルギーと土から生まれるのは農産物とエネルギーなんだと、つまりエネルギーも農産物だというふうに捉えているんですね。

それが非常に、私は、考え方の転換が必要で、日本も農水省が営農型発電、ソーラーシェアリングを一応二〇一三年から認めて今二千件ぐらいにはなっているんですが、あれをもうちょっと私は、もっと開放した方がいいと思います。耕作放棄地七十万ヘクタールあるわけですから、耕作放棄地に農家の方が、農業の方がやる太陽光発電は農業の一環として、農地転換せずに自由にできるようにすると。それが外資のもうけになっちゃいけないので、その規制をしながら逆に農家の人たちが農業の一環としてやるような、そういう思い切った大胆な転換をすればその七十万ヘクタールだけでも日本の電力全て賄えますので、やっぱりそういう形に大胆な方針転換を是非先生の方からも御提言いただければと思います。

○宮崎雅夫君 ありがとうございます。以上で終わります。

(以下略)

